

新建築

SHINKENCHIKU:2013

3



陸前高田の「みんなの家」

設計 伊東豊雄建築設計事務所 乾久美子建築設計事務所 藤本壮介建築設計事務所 平田晃久建築設計事務所

施工 シェルター

所在地 岩手県陸前高田市

"HOME FOR ALL" FOR RIKUZENTAKATA

architects: TOYO ITO & ASSOCIATES, ARCHITECTS / OFFICE OF KUMIKO INUI / SOU FUJIMOTO ARCHITECTS / AKIHISA HIRATA ARCHITECTURE OFFICE

北東側より見る。東日本大震災によって被災した陸前高田地域のひととの集いの場としてつくられた集会所。津波で立ち枯れた木々の幹木柱を用い、さまざまな高さの居場所が内列に設けられる。この建物は、建設のプロセスは、第18回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展、日本館展示「コミュニティ」伊東豊雄、後加藤誠、乾久美子、藤本壮介、平田晃久、山崎由希子として紹介された（表紙1210）。建設費は寄付や企業の協賛によってまかなわれている。中に現地の「リーガル」的存在である買手が若干などの話し合いによって設計が進められた。

左より見る。存在する19本の丸太は、津波の被害を受けた地域のスキムから、地元民の手で集められたもの。ボランティアの手で建てられた。



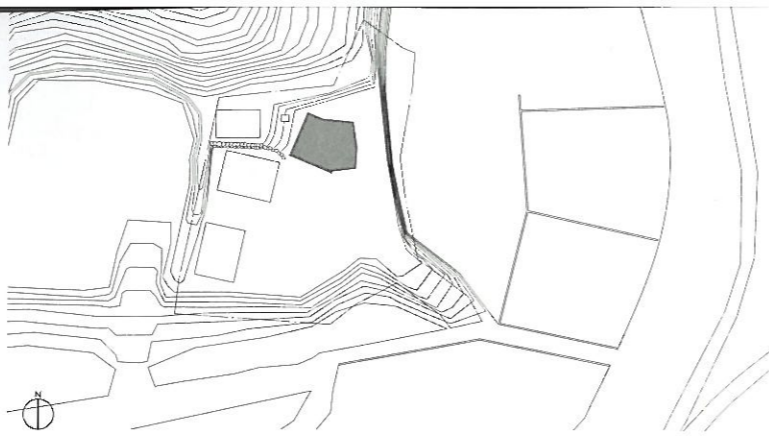
南西より見る。津波で流された平地と津波を押し止めた崖の境界にある小高い丘に建つ。建物の最高高さは約9m。「みんなの家」の周囲には菅原みきさんが建て、活動の拠点としているテントなどが点在する。



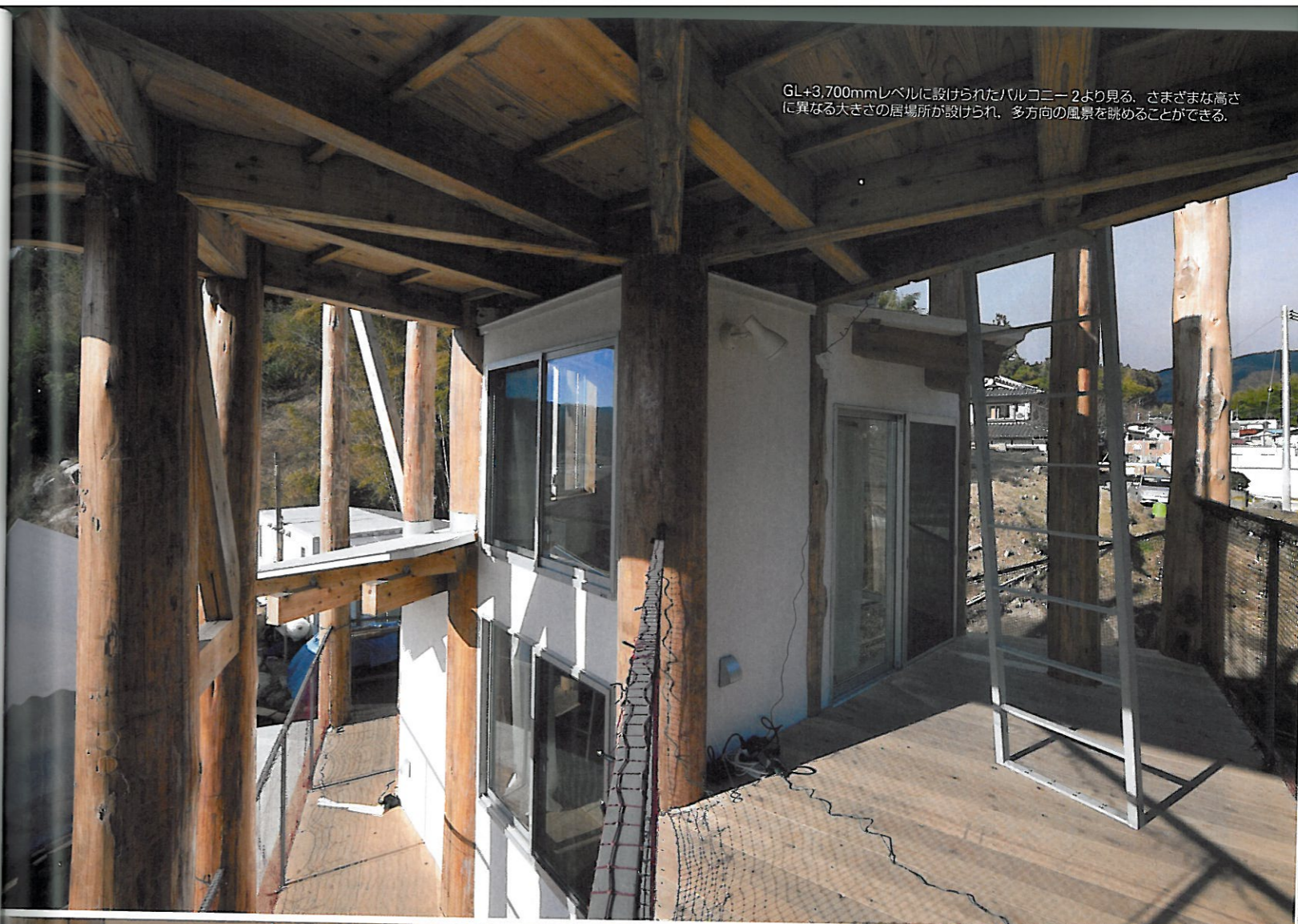
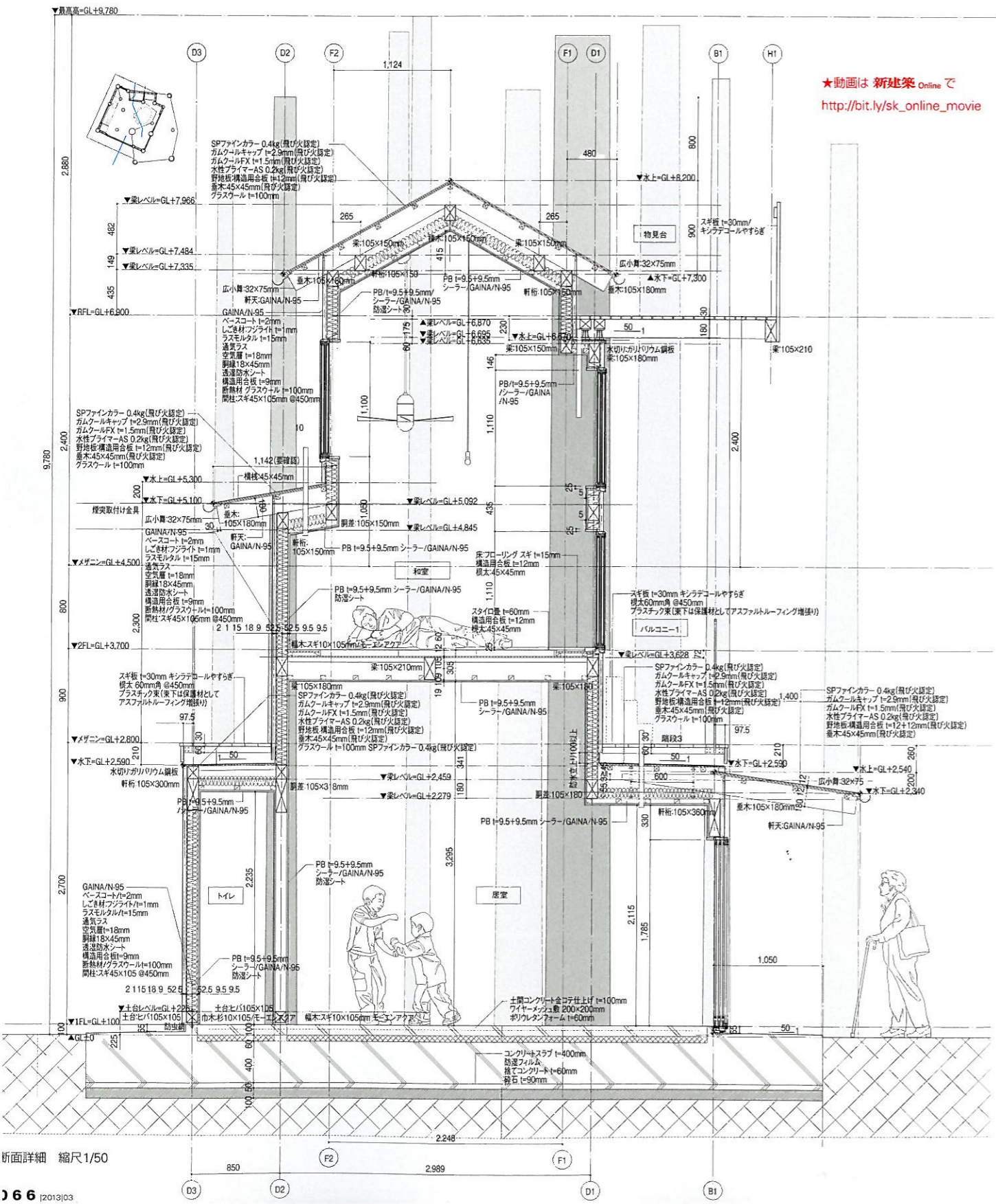
設計 建築 伊東豊雄建築設計事務所・乾久美子
建築設計事務所・平田晃久建築設計事務所
事務所・藤本壮介建築設計事務所
構造 佐藤淳構造設計事務所
施工 シェルター
敷地面積 901.71m²
建築面積 30.18m²
延床面積 29.96m²
階数 地上2階
構造 木造(KES構法)
工期 2012年7月～11月
撮影 新建築社写真部(特記を除く)
(データシート196頁)



南西側より見る全景。



配置 縮尺1/1,000



GL+3,700mmレベルに設けられたバルコニー2より見る。さまざまな高さ
 に異なる大きさの居場所が設けられ、多方向の風景を眺めることができる。



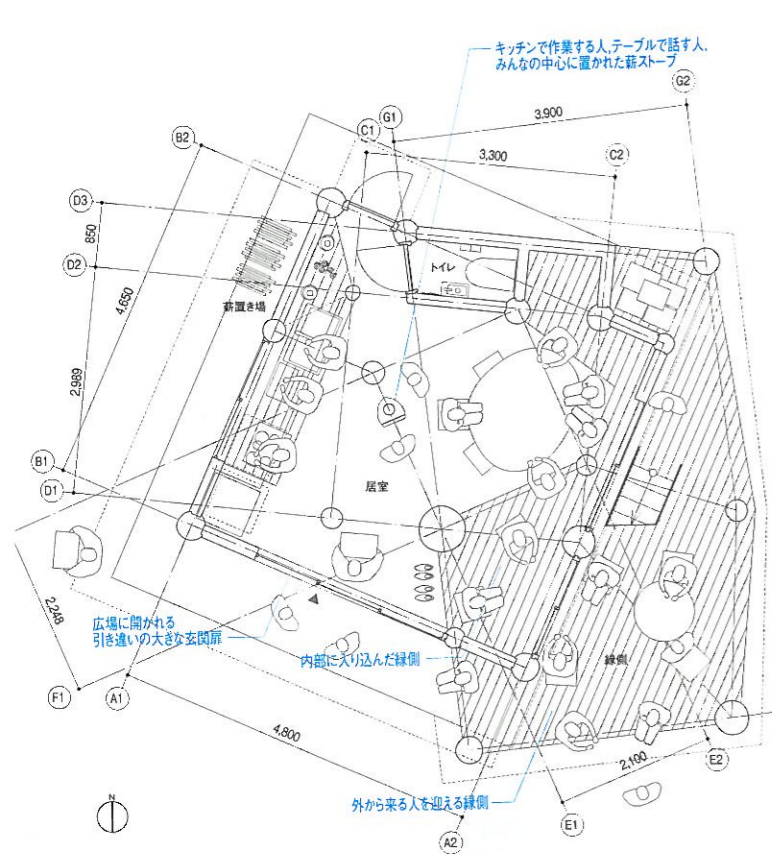
丸太材がランダムに入り込む1階居室。薪ストーブ
 を中心に、キッチンや小上がりが設けられている。



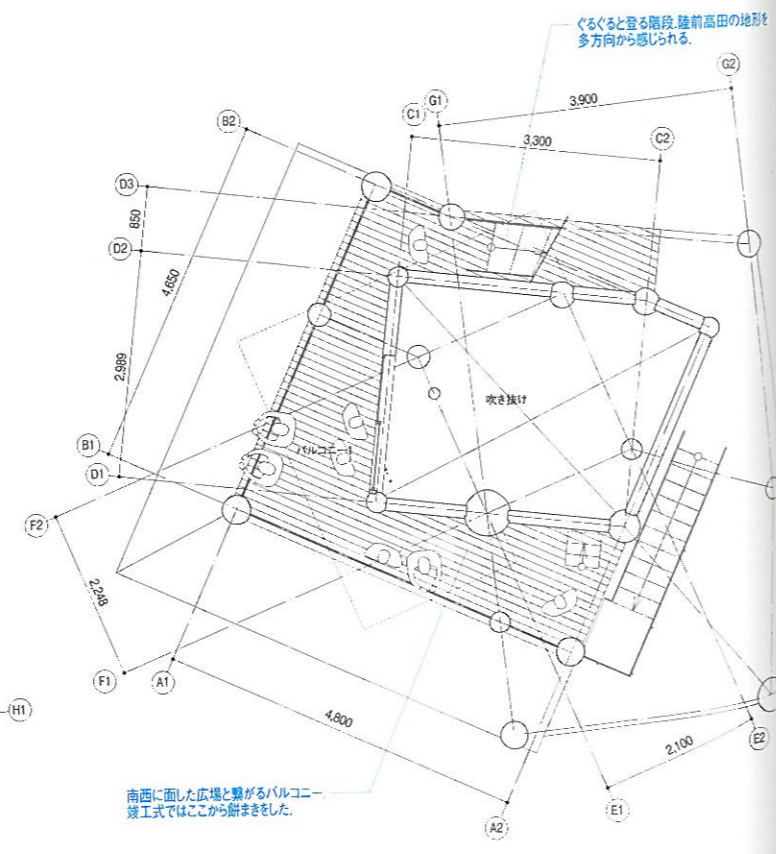
GL+3,700mmレベルに設けられた和室。カーテンは安東陽子氏による。



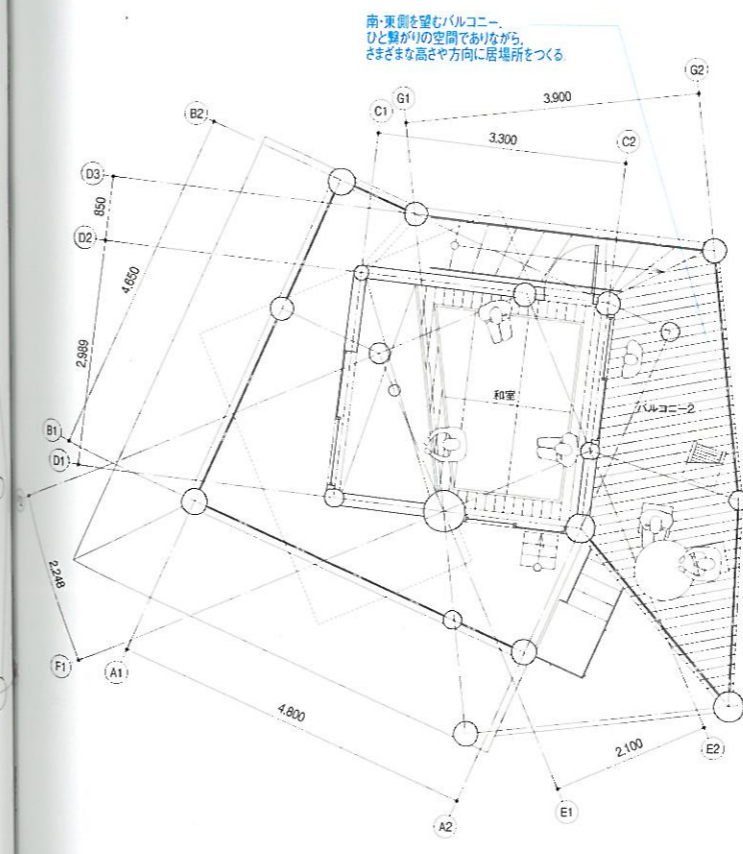
北側崖地より見る。



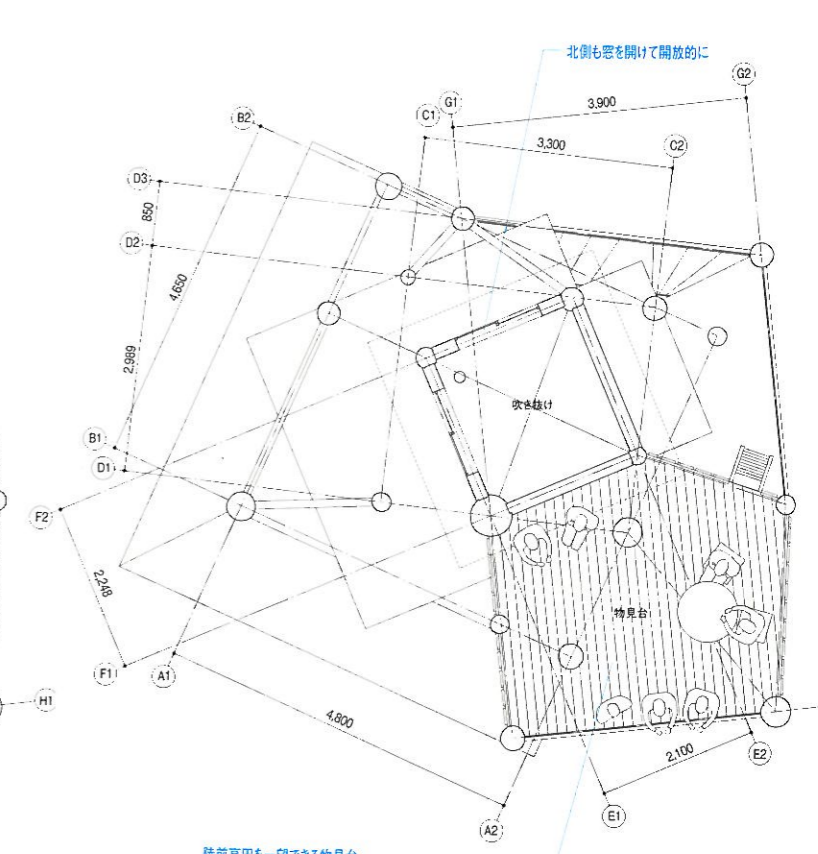
陸前高田のみんなの家GL+1,000mm平面 縮尺1/100



みんなの家GL+3,000mm平面



みんなの家GL+5,000mm平面



みんなの家GL+7,000mm平面

「場をつくる力」を支える建築の役割

乾久美子×藤本壮介×平田晃久（建築家）



座談会の様子。左から、藤本壮介氏、平田晃久氏、乾久美子氏。

「建築に何か可能か」という問いと向き合って

— 2011年3月11日、東日本大震災が発生してから2年が経とうとしています。伊東豊雄さんの呼びかけをきっかけに陸前高田の「みんなの家」の設計に関わられ、今、建築の役割についてどのような実感をお持ちなのかを伺えますか。

乾久美子（以下、乾） 震災直後、建築家という立場で何ができるかまったく分からずにいたところ、伊東豊雄さんから、被災した土地で寄付や協賛によって人びとの集まれる場をつくり、またその過程をヴェネチア・ビエンナーレ建築展の日本館展示（本誌1210）として世に問いたいという話を伺いました。2011年11月頃のことです。まず、写真家の畠山直哉さんのご出身である陸前高田市を訪れ、被災された方のお話を聞くことからスタートしたのですが、現地で生の声を聞けば聞くほど、被災した土地において何が可能かという問いの重さを改めて実感し、ますます自分に何ができるのだろうかとか焦るような気持ちが強くなっていました。ただ、1年をかけて陸前高田に通い被災地の方々の肉声を聞き続けていく中で、仮設の商店街ができてきたり、彼らの顔が少しずつ明るくなっているような感じを共有できたことで、あまり奇をてわらずとも、建築にできることがあるんじゃないかということが分かってきました。まずはそのプロセスが重要だったと感じています。

平田晃久（以下、平田） そうですね。震災直後は、何かの役に立ちたいという思いは強くあるものの、自分たちがこれまで建築家としてやってきたことが被災地で役に立つのかと問われると、甚だ心許なかった。僕は、建築というのは1〜2年で世の中を変えるのではなく、50年、100年かけてじわりと浸透しながら、ものの考え方を変えていくものではないかと考えていましたから、被災地の切迫する状況では言葉を失っていました。限られた資金と限られた時間の中で、無駄ではない何かをつくらなくてはならないというプレッシャーがあり、今までそういうことをシビアに考えてこなかった自分が、本当に関わってよいものだろうかと思っていました。

藤本壮介（以下、藤本） 僕も軽いショック状態に陥っていたように思います。被災地との物理的な接点がなかったこともあり、建築に今何が可能かということから目を背けて、とにかく目の前の作業をこなすような状態でした。一方で、この震災が建築に、

から伊東豊雄さんから、「ここに、建築は、可能か」というテーマで、陸前高田の「みんなの家」のプロジェクに声をかけていただいた時には、震災後の建築の本質を考える大きな出来事になる予感もありましたが、まだ抽象的な意味で「建築の新しいあり方」を思考することに終始していました。転機となったのは、陸前高田に行って、現地の方がたに会えば、彼らの間に共同体が築かれているのを目の当たりにしたことです。それまで漠然として実感が伴わなかった「社会」というものが、そこではとてもリアルに感じられました。「建築の新しいあり方」なんて大げさなものではなく、彼らが集まって話をするための場を素直につくればよいのだと思えたんです。

平田 普段、建築が何かのきっかけをつくる存在でなくては行けないと考えて「からまりしろ」という言葉を使っていますが、今回の場合は、この建物が建つ場所にさまざまなきっかけ、いわばバーチャルな「からまりしろ」が、すでに発生していたんです。私たちはそれに巻き込まれるようにして入っていった。それは不思議な体験でした。建築のはじまりが、建築家がつくり、与えるものではなく、社会のはじまりと同時にあるような理想的な状況だと感じました。

— 現地の人びとは、どのようなコミュニケーションをとりながら進められたのでしょうか。

乾 現地のリーダー的な存在である菅原みき子さんという女性と打ち合わせをしながら進めていきました。菅原さんは震災後、みずから「元気ハウス」という小さなテントを建てて、そこで被災した方がたと編み物でエコタワシを制作し、現金を得る活動を少しずつ始めていました。ひっきりなしに彼女の元に地元の人びとが訪れるのを見て、菅原さん對話して進めれば、その背後にいる人びとの思いもすく取れるだろうと考えました。

平田 菅原さんがリーダー的な存在になったのは、彼女の行動力に人びとが自然に信頼を寄せていった結果だと思います。たとえば、津波で病院の屋上に避難したもののトイレがない状況で、菅原さんがいち早く、その場にある布きれや棒で仮設の仕切りを組み立てた、ということがあったそうです。非常事態には肩書きよりも、その人自身の行動力が前面に出てきます。

乾 打ち合わせの時には仲間の皆さんも「元気ハウ

ス」に来ていて、打ち合わせに参加することはなくとも、隣で焼き芋やホルモンを焼いていらしゃるので、その存在は常に感じられる状態にありました。**藤本** 近所の皆さんを交えた何気ないやり取りが、とても大きかったですね。彼らは直接的に「こういうものがほしい」という主張の仕方はいらないです。ただひたすら雑談的に、こんなことがあった、あの時はどうだった、そういうば……と話が続いていく。その輪に加わりながら、会話の端々や普段の立ち振る舞いから、暮らしぶりやその奥にある思いを知っていききました。そこには、人と人の個人的な繋がりがそのまま社会になった、原始共同体のような雰囲気がありました。だからここでは、ワークショップ形式で要望を書き出してもらうような方法はうまくいかなかったと思うんです。そういう「仕組み」の中では個人の意見はその人から切り離され、たくさんの意見の中のひとつになってしまう。あの場所では、個人の思い出が、体験が、思いが、他の個人と有機的に繋がると、社会的な思い出や、体験や、思いになっていくような、キラキラした感覚があった。意見、要望というものになる以前の、その場所全体が持っている想いのようなものが徐々に立ち現れてきたような感覚を、僕たち5人が共有してからは、案の進め方も素直になった気がします。

平田 初期に菅原さんが聞かせてくれたジャズドラマーの話が印象に残っています。震災直後、陸前高田にも大勢のチャリティのパフォーマーが来て、仮設住宅で演奏してくれたそうです。そこで、あるジャズドラマーが即興で一生懸命演奏してくれたそうなのですが、よく分からずにぼかんとしてしまった。この話に私は笑ってしまいつつ、建築もそういう状態にならかねないと思う自分がありました。建築家が何かを感じ取って形にしていくことが、どこまで確かなものなのかということに対する迷いは常にありました。

乾 竣工式の日も仲間の皆さんが繰り出して料理をつかって参加者をもてなしてくださり、自分たちが使う建物なのに、その日の昼間はまったく中に入れなまま夜を迎えてしまったのです。しかし、夜になって大体のお客さんが帰ってからようやく中にそーつと入ってきて、「なるほど。こんな感じなんだね、いいねえ」などと笑顔で見られました。その表情や様子が本当によくて……。彼らの立ち振る舞いか

らどういう場所が必要かを考えてつくってきたけど、それは間違いはなかったんだなと思えました。

生まれつつある動きをすく上げて建築をつくる

— これまで伊東豊雄さんが取り組まれてきた「みんなの家」では、表現をあえて避ける姿勢も見られましたが、建築をつくるということはどうらえていましたか。

乾 今回は、場所も象徴的ですし、あの場所に何かが建つことの意味がとてつもなく大きく、そこでは建築が確かに必要とされていたと思います。とは言え、建築だけにこだわっても仕方がないので、意図的な表現の放棄も同時にしていた部分があります。

平田 当初の予定のまま、陸前高田の大隈仮設住宅内の30世帯のために「みんなの家」をつくっていたら、こういう形にはならなかったでしょうね。ある日、菅原さんが「よい敷地をみつけたから」と言われてわれわれを連れて行ってくれたのですが、そこは、津波で流された平地と津波を押しとどめた崖が合いう先端の小高い丘で、海からの風が強く吹いてくるような印象的な場所でした。いくつかの仮設住宅からの中間地点的な場所でもあり、そこに、地域の人びとの結節点としての役割を持たせたいという明確な意思を強く感じたのです。

藤本 点在する仮設住宅地間を車で行き来しながら、地元の人たちが集まり活動をしている状況とこの地形が相まって、そこに文化が芽生えはじめていました。そういう光景を見ていると、自然に「こういう拠点となる場所は、遠くからも見えるものだといいよね」という話になり、結果9mほどの高さになっていきました。原始的な建築の象徴性とはそういうものだったのではないのでしょうか。建築の役割とは、そこで起こっていること、起こりつつあることに、場所と形を与えることだと思えます。

履歴を組み込む建築のあり方

— 具体的な設計ではどのようなことを考えましたか。

平田 津波で立ち枯れたスギを切って柱に使える運びになったことは、光栄であると同時に、非常に重いものでした。この丸太を無駄にしたいわけないと強く感じ、丸太が空間の中まで入り込んでくるような、いきいきとした状態にしたいと思いました。同時に丸太を用いて、陸前高田の山の端や地形みたいに、空間がなめらかに流れていくような、ゆるやかな場所の連なりをつくりたいという思いもあって。

藤本 スタディを重ねる中で、ひとつのスペースに皆が集まるのではなく、こちらとあちらで場所が分かれたり、いろんなレベルのテラスがあったりと、いくつかのスケールが同居する場になるといいよね、という話になっていたんですね。そうするとランダム配置の方が場所の使い方が多様になってよいなと、**平田** 敷地を取り囲むようにスギ林が立っているこの場所でスギを使うことの意義と、ゆるく仕切られた流動的な空間にしたいということ、一方で切り

妻屋根架構のような、何か家の形を感じるものがあつた方がよい、ということとは3人の共通意見としてありましたが、それらを統合しようとすると、かなり非合理的な構造になってしまいます。それは丸太に失礼な気がして、どうしたらその空間を成立させつつシンプルな架構になるか、ということはずっと考えていました。

乾 私は、今回は特に無理のある形をつくることに違和感を覚えていたので、わざわざ空間を流動的にさせることに最初は異議を唱えていましたが、平田さんがそれまでの議論をすべて引き受けながらも、全体を統合した最終案をポンと出してくださった時、その意味に納得しました。

藤本 僕はそういう流動的な場所がつかれるなら、多少架構が複雑になってもよいかと思っていましたが（笑）、幸い3人で設計していたので、複数の概念を組み合わせてくれたのはとてもよかったですね。

平田 人が集まって、共に何かをすることの意義は、それぞれの感受性で鋭く感じ取ったものを他の人も共有できるレベルまで突き詰めていくことだと思うんです。間を取って最大公約数的なものをつくるなら、ひとりですくった方がよい。

藤本 普通は、建築家のようにある意思を持った人が枠組みの中で全体を調整しますが、今回は、「この建築はこの枠組みだからこれはなし」と調整することなく、常に調整しきれないアイデアを受け入れながら膨らみ、ポテンシャルがどんどん高まっていきました。これはわれわれ3人に加え、伊東さん、畠山さんと共につくっていたからこそだと思います。先の社会の仕組みの話にも繋がりますが、建築の枠組みをしっかりとつくと、部分が単に部分で終わってしまう。でもこの建物では、部分がその個性を主張しながら全体の統合性に寄与しているような不思議な共存関係がある。それが面白かったですね。

平田 伊東さんがいつかの対談で、「ものがたり」が建築に必要なという話をされていたのですが、自分たちは今までそうした「ものがたり」をきちんと扱ってこなかったのではないかと感じました。たとえば、この丸太ひとつとってもさまざまな履歴が入り込んでくるし、切り妻屋根という形式にもある種の履歴が入り込んでいて、それらと不可分なものです。とはいえ、履歴のあるものをただ寄せ集めるのではなく、それをきちんと「建築」として有機的なまとまりを持たせることも大切だと思います。

乾 もちろん要素要素では近代で持ち得た思考をもとに、建築として構築するための判断はしていたのですが、まずは、込められた意味や履歴も引き受けて真摯にもものを扱わなければならなかった。それはある意味、現代建築が捨ててきたものを拾うような感覚でした。ただ、履歴を考えるあまり、必然性のないものまでも引き寄せようとしたこともありました。素材の最終決定のために、1/10模型に貼り付けながら検討していた時です。屋根の素材について、「現地でよく見かける赤いトタン屋根がよかったね」とか「これを使えば周囲の屋根並みと連続して

見えるのではないかな」と話していたのですが、畠山さんがそこでひと言、「戯れを感じる」とおっしゃったんです。それは非常に鋭いひと言でした。「ものがたり」に手がかりを求めすぎていたのだと思います。畠山さんは被災者であり、かつ表現を理解する写真家であるという、中間的な存在としてわれわれの仕事に常に冷静に見ておられて、その存在はとても大きいものでした。

藤本 その時は、丸太などの強い履歴のあるものに押されて、すべてのものに履歴を求めていた気がします。そうすると半ば履歴のねつ造のようなこと起きてきて、知らず知らずポストモダンのような履歴のゲームになってしまっていた。畠山さんの一言で、皆がふっと我に返り、それは本当に設計の最終段階だったので、もう一度、それぞれのモノの履歴を、あるものは尊重し、ないものはないものとして、真摯に丁寧に重ね合わせていきました。それによって建物と場所と人びとと記憶と未来が有機的に生き生きとした総体となる、そういう建築のあり方に皆が気付かされました。

平田 畠山さんに指摘されて改めて、この建物の持っている役割のひとつが、この町の復興のきっかけとなることならば、古いものの寄せ集めではなく、未来に向けた新しさも持っていないといけないのではないかと感じました。被災地における復興プロジェクトは、時間も予算も厳しく、無駄なことはできませんが、建築の可能性を信じてよりよい状態を実現していきたい気持ちもあり、そこに建築家が参加する意味があると思うんです。表面的な前衛さを狙うのではなく、もっと根本的な考え方から見直した時に、建築に変化が起こるのではないかと考えています。

藤本 常に新しいものが生み出され、次世代に繋がるものも淘汰されるものもある、というのが定常状態だと思うので、今回、さまざまな段階を積み重ねていった結果、どこにもない新しいものができ上がった、という事実は、とても大切な気がします。新しいことだけが建築の目的ではありませんが、「悪」でもありません。だから、このみんなの家ができ上がった時、とても希望に満ちた感じがしたんです。このみんなの家はとても象徴的でありながら、同時にいろいろなものを巻き込む緩さを持つ、都市的なものになっていると思います。今後、街の復興がどう進められていくか分かりませんが、すでに起こりつつあるこうした小さな動きも組み込まれるような、柔軟な計画がされるといい感じの街になるのではないのでしょうか。

（2013年2月12日、新建築社にて 文責：本誌編集部）



左：陸前高田でのミーティング。中央に菅原みき子さん。

陸前高田の「みんなの家」 (本文62頁)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1303_map

所在地 岩手県陸前高田市

主要用途 事務所 (応急仮設建築物)

設計

建築 **伊東豊雄建築設計事務所**

担当/伊東豊雄 古林豊彦
井上智香子

乾久美子建築設計事務所

担当/乾久美子 綿引洋

平田晃久建築設計事務所

担当/平田晃久 外木裕子

松井さやか 荒井亮蔵

藤本壮介建築設計事務所

担当/藤本壮介 桐圭佑 岩田正輝

構造 佐藤淳造設計事務所

担当/佐藤淳 荒木美香 井上健一

監理 伊東豊雄建築設計事務所

担当/伊東豊雄 古林豊彦

井上智香子

乾久美子建築設計事務所

担当/乾久美子 綿引洋

土地協力 中村正司

山林協力 菅野勝郎 (丸枘材木店)

撮影協力 畠山直哉 畠山容平

特別協力 陸前高田市の皆様 (菅野修吾

菊池満夫 吉田光昭 菅原みき子 他多数)

中田英寿

施工 シェルター

担当/木村仁大 眞木徹 武田純一

山口徹

衛生 千葉設備工業

電気 菅原電工

施工協力

丸太伐採 陸前高田市役所農林課 吉田光昭

銚子林業 熊谷秀一

丸太皮むき 菅原みき子

宮城大学中田千彦研究室

(中田千彦 伊藤千晴 薄上紘太郎

小野松由紀 佐藤絢香 高田詩乃

武田恵佳 富沢綾子 山内健太)

シェルター

(木村仁大 田中研一 佐々木詩織

安達真也 松井錬 鈴木和幸

原田晴央)

畠山直哉

畠山容平

国際交流基金 (森多恵)

丸太塗装・壁塗装・家具製作など 宮城大学

中田千彦研究室

(青野孝裕 伊藤千晴 薄上紘太郎

山内健太 大槻優花 角悠一郎

米山貴士 高田詩乃 網取はなこ
佐藤絢香 富沢綾子 貝沼泉実
鈴木香織 青柳めぐみ)
東北大学
(Adil Siddiqui 永田敦 斉藤遼介)
シェルター
(眞木徹 木村仁大 山口徹
小川祐史 荒井拓 室山信行 草刈愛
安達真也 松井錬 設楽浩次
佐藤公紀 福井英理 笹原英恵
鈴木和幸 原田晴央 渡邊太)
千葉武晴
国際交流基金 (森多恵)

資金協力

アーキテクト・スタジオ・ジャパン
石橋財団
大光電機
田島ルーフィング
東工大建築S39年卒有志の方々
Fashion Girls for Japan
Zoom Japon (+募金いただいたフランスの
方々)

JAPONAIDE

Corinne Quentin
芝崎佳代
相馬英子
富永伸平
陳飛翔
新沼桂子
オノデラマナブ
フジサキフキコ
N.Y.

協賛企業

荒川技研工業
安東陽子デザイン
岩岡
キャピタルペイント
ケイ・エス・シー
三陸木材高次加工協同組合
シェルター
大光電機
田島ルーフィング
チヨダウーテ
東工
日建総業
日進産業
日本エンパイロンケミカルズ
日本暖炉新ストーブマイスターグループ (ぜい
たく屋, 小島)
日本ペイント販売
ハーフェレジャパン
マグ・インパール
LIXIL

規模

敷地面積 901.71m²

建築面積 30.18m²
延床面積 29.96m²
1階 23.46m² / 2階 7.78m²
建蔽率 3.34% (許容: 60%)
容積率 3.32% (許容: 200%)
階数 地上2階
寸法
最高高 9,600mm
軒高 8,500mm
階高 居室: 3,600mm
倉庫: 3,869~4,500mm
平均天井高 居室: 3,698mm
倉庫: 2,229mm

敷地条件

地域地区 法22条地域 第一種住居地域
被災市街地復興推進地域

道路幅員 両2.3m

構造

主体構造 木造
杭・基礎 ベタ基礎

設備

衛生設備
給水 水道直結方式
給湯 ガス給湯器
排水 下水接続方式

工程

設計期間 2011年11月~2012年6月
施工期間 2012年7月~11月

外仕上げ

屋根 アスファルト防水 (田島ルーフィング)
外壁 モルタル (富士川建材工業: ラスモル
II ノンクラック通気工法) 断熱塗装
(日進産業: GAINA)

開口部 アルミサッシ (LIXIL: SAMOS-S)
デッキ スギ t=30mm キシラデコール塗装
(日本エンパイロンケミカルズ: キシラ
デコールやすらぎ)

内仕上げ

居室・トイレ
床 土間コンクリート金コテ仕上げ
壁・天井 PB t=9.5mm 2枚貼り 断熱塗装
(日進産業: GAINA)

倉庫

床 スタイロ量 スギ板張り
壁・天井 PB t=9.5mm 2枚貼り 断熱塗装
(日進産業: GAINA)

●陸前高田の「みんなの家」への資金提供受付口座

口座名: 陸前高田みんなの家 代表 菅原みき子
銀行名: 東北銀行 高田支店
口座番号: 普通5001045
HP: http://rikuzentakataminnaoie.jimdo.com/

伊東豊雄 (いとう・とよお)



1941年京城市 (現ソウル)
生まれ / 1965年東京大学
工学部建築学科卒業 /
1965~69年菊竹清訓建築
設計事務所 / 1971年UR-
BOT設立 / 1979年伊東豊雄建築設計事務所
に名称変更 / 現在, AIA名誉会員, RIBA名誉
会員, くまもとアートポリスコミッショナー

乾久美子 (いぬい・くみこ)



1969年大阪府生まれ /
1992年東京藝術大学美術
学部建築学科卒業 / 1996
年イェール大学大学院建築学
部修了 / 1996~2000年
青木淳建築計画事務所 / 2000年乾久美子建
築設計事務所設立 / 現在, 東京藝術大学美術
学部建築科准教授

藤本壮介 (ふじもと・そうすけ)



1971年北海道生まれ /
1994年東京大学工学部建
築学科卒業 / 2000年藤本
壮介建築設計事務所設立

平田晃久 (ひらた・あきひさ)



1971年大阪府生まれ /
1994年京都大学工学部建
築学科卒業 / 1997年京都
大学大学院工学部研究科修
了 / 1997~2005年伊東
豊雄建築設計事務所 / 2005年平田晃久建
築設計事務所設立 / 現在, 東北大学特任准教授

畠山直哉 (はたけやま・なおや)



1958年岩手県陸前高田市
生まれ / 1984年筑波大学
大学院芸術研究科修士課程
修了 / 東京を拠点に活動,
自然・都市・写真のかかわ
り合いに主眼をおいた一連の作品を制作 /
2001年中村政人, 藤本由紀夫と共にヴェニ
ス・ビエンナーレ日本館にて展示 (コミッショ
ナー: 滝坂恵理子) / 2012年サンフランシ
スコ近代美術館にて津波被災後の故郷, 陸前
高田の風景を含めた展覧会「ナチュラル・ス
トーリーズ」を開催。



津波による塩害で立ち枯れしたスギを伐採。
ボランティアの手によって丸太の皮むきを行う。

上棟式。